

「底が突き抜けた」時代の歩き方 490

「働くこと」が吐かせる台詞「俺が喰わせてやっている」

ひきこもり少年による水戸の両親惨殺事件について考えれば考えるほど、「これから子供に寄り添ってやっていく」「新しい人生を歩いていくつもり」で小学校を退職した母親は、ひきこもっていた息子と娘を連れてニュージーランドに渡ったのであれば、子どもたちのひきこもりが好転するまで現地に踏みとどまって、悪戦苦闘をするべきだったとつくづく思う。後知恵にすぎないかもしれないが、ひきこもりが悪化するだけの家族関係から抜け出すようにして新天地に赴いたのであれば、そこでなんとしてでも踏ん張るべきであった。百パーセント子どもを受け入れるということは、そういうことであった。だがニュージーランド移住は三カ月ほどで挫折し、母親も子どもたちも変わらないまま帰国した。結果的には望みを託して失敗した分、子どもたちのひきこもりからの脱出に救いがなくなった点で、ニュージーランド移住はよくなかったといえるかもしれない。

中学校で教師をしていたためか、一緒にニュージーランドに行かなかった父親は、そのとき一体なにをしていたのだろう。同じ日に起きた土浦の両親、姉惨殺事件で28歳の長男が、「父親がいる限り、居場所がない。死刑になっても殺すしかない」「母と姉の殺害は父を殺すための準備だった」と供述しているように、子どもにとっては抑圧的にすら感じられるほどの厳格な父親像が浮かんでくるのに対して、水戸の事件では父親像が希薄なのである。母親と共にニュージーランドに渡るわけでもなし、子どもたちは母親に任せて自分は仕送りに徹するという、役割分担を明確にしているだけのような感じで、ひきこもりの子どもたちに取り組んだ印象は母親と較べて、どこからも伝わってこない。母親の祖父との同居のなかで、父親不在と思われるほど父親像はみえてこない。

斎藤環は『ちくま』(04・12)で、娘達のエッセイから、『単なる子煩悩のパパ』とみられてきた森鷗外のなかに『あまりにも細部まで配慮が行き届きすぎて、むしろうっとうしいまでに優しい父親イメージ』が浮かび上がり、『私はどうしても、こうした「うっとうしさ」の感覚に引っかかる』として、『追憶の中でまでそのように感じられる父親の「優しさ」は、単なる愛情の自然な発露とはどうしても思われぬ。そこにはむしろ、鷗外自身の不安が反映されてはいなかっただろうか』と書いている。「鷗外自身の不安」とは、「近代」が家族や社会のあり方に及ぼす影響を予見するなかで、『近代化してゆく家族にあって、父性がどのような意味を持ちうるかを予感し、あるいは不安を覚えたことによるものではなかったか』と推測する。近代以前では確固としていた(であろう)父性が近代化のなかで揺れていく不安を、鷗外の『うっとうしいまでに優しい

父親イメージ》は映しだしてはいなかったか、と主張しているのだ。

近代化のなかで父性が揺れていくことに感じた「鷗外の不安」は、「父性不在」に直面している現代の我々の不安にまでつながっている、ということである。いま父親は、家族のなかでどのような存在たりえているのか。

《たとえば、家庭内での虐待や暴力に対しては、世間はおおむね寛大であるか、無関心であるように思われる。母子家庭と父子家庭は、欠如という点では同等であるはずだが、後者のほうが「世間」的には不安定な印象を与えるだろう。父親の失業は世間的には一大事だが、母親が専業主婦でひきこもりがちであったとしても、世間は無関心である。むしろ母親が就労していたりすると、世間はすぐさま批判的な視線を向けようとする。ここで私がとりわけ関心を持つのは、世間と「父親」の関係性である。

ごくおおざっぱに言って、家族の対社会的イメージを決定づけるのは父親である。具体的には父親の社会的地位が、家族の社会的な顔そのものなのだ。その一方で、家族の対世間的イメージを決定づけるのは母親なのではないだろうか。たとえば「単身赴任」という言葉を聞いて、ほとんどの人が反射的に「父親不在」の家庭を連想する。これは母親の単身赴任というイメージがまったく欠如しており、さらに言えば、そのような事態はあるべきことではない、という規範意識もここに関わってくるだろう。要するに父親とは、家族にとっての下部構造なのであり、経済的には欠かせない基盤ではあっても、情緒的に不可欠な存在とは言えないということだ。》

以上の斎藤環の論述で押さえておくべき点は、ふたつある。ひとつは、《世間と「父親」の関係性であり、「変わらない」父親とは、単に家族関係のなかで「変わらない」父親の謂であるばかりでなく、世間に対しても「変わらない」父親であることをも意味している。世間に対して「変わらない」父親は当然、家族関係のなかでも「変わらない」が、そのとき父親は世間を背負って家族に対してしている。したがって、ひきこもりの子どもは父親から責められながら、同時に世間からも責められている構造になっている。このことは逆にいえば、ひきこもりは家族関係からのひきこもりであり、同時に世間からのひきこもりであるということだ。世間を背負った父親はひきこもりの子どもに対して変わることはできず、変わるためにはまず世間との関係を変えなくてはならない。そのとき、ひきこもりの子どもの父親として子どもに向き合うことができ、子どもにとって親がどうあることがベストであるか、を考えることができるにちがいない。

もうひとつは、《父親とは、家族にとっての下部構造なのであり、経済的には欠かせない基盤ではあっても、情緒的に不可欠な存在とは言えない》という指摘である。はっきりいえば、父親はお金を稼いでくるだけの存在であって、家族のなかでは何の役にも立たない存在であるということだ。水戸の両親惨殺事件をみていると、少年の父親はまさしくそのような存在であった。母親が中途半端なかたちであれ、積極的に行動するのに、父親は給料を稼いでくるだけの存在のようにならなかつた。世間を背負

っているにはちがいがなかったが、そのイメージもまた、希薄であった。韓国ではそのような父親は「雁パパ」なる言葉で呼称されている、と齋藤環はいう。

韓国でひきこもりの研究に当たっている《李博士によれば、最近の韓国は異常とも言える英語ブームで、親が別居してまでも子どもをアメリカやカナダに早期留学させる家庭が増えているらしい。中学生くらいの年齢から、母親がわが子に付き添って海外に渡航するのである。当然、父親は一人取り残され、言うなれば逆単身赴任とでもいうべき状態におかれる。(中略)海外にいる母親と子どもの生活費と教育費を仕送りすべく、ひとり残された父親を、配偶者を失った独り雁になぞらえているのだ。李博士によれば、こうした父親はアルコール依存症になったり、自殺に至る確率がきわめて高いという。このため「雁パパ」のための自助グループまで存在するらしい。》

この韓国の社会現象について齋藤環は、《わが子の留学に付き添う母親達の動機には、同調圧力にも似た世間的な力が作用して》おり、他方《世間にとっては父親が立派であろうと堪え忍んでいようと、そんなことはどうでもいいのだ。父親は経済的なインフラとして機能し続ける限りにおいて、浮気しようが酒癖が悪かろうが、誰も問題にしようとは思わない。つまり、父親とはそれほどまでに「透明な存在」なのである》という。彼によれば、日本の臨床の現場でも《こうした父親不在の事例は珍しくない》らしい。たとえば、《父親にきつく叱られた娘が、その経験によるトラウマから(と娘は主張する)父親と同居することが耐えられなくなって、とうとう父親を家から追い出してしまった》事例を取り上げて説明する。

《この父親は決して娘をないがしろにしたり誤った父性で押さえ込んだりするタイプの父親ではない。むしろ「それが娘のためなら」と、唯々諾々と娘の(やや理不尽な)要求を受け入れ、せっかく建てた家を出てアパート暮らしをはじめると娘思いの父親なのだ。しかし娘は、父親のそうした思いやりを意に介することもなく、ますます母子密着状況に陥り、ひきこもり状態がいつそうこじれていくことになる。こうしたケースは珍しいものではない。

この種のケースで、父親はしばしば一時しのぎのつもりで別居生活を始めるのだが、自然に子どもの気が変わって帰宅できるようになることはほとんどない。気がついたら別居生活が数年以上に及んでしまい、戻るに戻れなくなっている。そう、父親がこうした形で家を出てしまったら、事実上、戻るチャンスは永遠にやってこない。無理に帰ろうとすれば子どもが恐怖からパニックになったり、父親の帰宅を許した母親に対してひどい暴力を振るったりすることもある。時には拒否が母親にまで及び、まったく口をきかなくなったり、顔を合わせることもすら拒むようになる場合もある。だから時には治療者が介入して、あの手この手で父親を家に戻す画策をしなければならなくなるのだ。》

これはもはや「父親不在の事例」を通り越して、「父親拒否の事例」とみなすほかない。韓国の「雁パパ」のように「透明な存在」どころか、同居することが耐えられなく

なるほど、娘にとっては「濁った存在」として父親は取り扱われている。近代化されていく家族のなかで揺れていく父親のあり方に募らせていた「鷗外の不安」は、父親が同居することを拒否される家族関係のかたちを取るにまで至ったといえる。この事例を前にすると、おとなしく自室で子どもがひきこもっているケースなど可愛いとすら思われるほどだ。自分が出て行かずに子どもを放り出すと、子どもが餓死するのは目に見えていると考える父親は自分から出て行くことになる。離婚も考えられなくはないが、そうなる母子共に餓死することになるので、父親はアパートから通勤して母子の食い扶持を確保するだけの存在に成り果てる。

《不思議なことに、同じ状況が母親に対して起こることはほとんどない。つまり、母親が家を追われて帰宅できなくなり、一方で子どもと父親と密着が深まる、という状況である。少なくとも私は、そうした事例を診た経験がない》と、斎藤環はいう。父親が家を追われて帰宅できなくなることはあっても、母親が家を追われて帰宅できなくなるという事例はない、ということは不思議でもなんでもないのであるかもしれない。なぜなら、《父親とは、家族にとっての下部構造なのであり、経済的には欠かせない基盤ではあっても、情緒的に不可欠な存在とは言えない》からだ。つまり、いくら同居していても、経済的な基盤としての役割を担えなくなったら、もはや父親としての意味はないということである。では経済的な基盤たりえない母親は、どうなのか。母親は「情緒的に不可欠な存在」である、ということだ。

もし本当に父親が家族における経済的基盤以上の存在ではありえないとすれば、そのような存在として妻や子どもと同居しているだけのことで、必ずしも同居しなくてはならないものでもないだろう。この考えのうえに韓国の「雁パパ」は成り立っている。父親は子どもの成長にとって不可欠な存在でもなんでもないのである。彼はこう論を進める。

《父親はもともと、家族にあっては不自然な存在なのである。その存在は、子供の心理的成熟の過程でまっさきに殺されてしまう。父性の復権が困難であるのは、家庭における父性の役割がなんであったかを考えれば理解されるであろう。まず第一に、父性は家族における社会的機能の象徴である。より具体的には、社会的地位と経済的保証の機能である。こちらは現在でも有効であるが、ただしこれらは、家庭内に父親が存在していなくても十分に機能するであろう。

父性の第二の機能は、「血縁」の象徴である。父系社会にあっては、家族に対して影響力を持ちうるのは、基本的には父方の血縁関係者のみである。要するに父親の存在は、横軸としては社会的な立ち位置を明確化し、また縦軸としては家系と血縁のネットワークにおける位置づけを担うものであったわけだ。》

父親はお金を稼いでくるだけの存在ではない。お金と共にお金を稼ぐ社会的なメカニズムをも、家庭の中に持ち込んでくる存在である。つまり、社会的な関係性に組み込まれてしまっている分、家族から逸脱している。だから、《父親はもともと、家族にあって

ては不自然な存在なのである。》お金を稼いでくる人がいなければ、家族は維持できないということは、家族の中から外の社会にむかって働きに出る人がいなくてはならないということであり、その役割を父親が担っていたのだが、このことはまた、父親はその役割を担う以外に家族に対してすることはなにもないことを明らかにしていた。もちろんその役割は、父親以外の誰も引き受けることができないものではなかった。だが、父系社会は父親の存在を基軸にして成り立っていたので、家族の中での父親存在の不自然さを強固にカバーするために、父方の血縁関係を家族関係の支柱としていたのだ。

《しかるに「家族の近代化」は、何をもたらしてきたか。社会の成熟化と富裕化にともない、地域共同体が希薄化し、家庭は密室化して排他的となり、血縁関係の重要性は後退した。その結果、父親に残された重要な役割は経済的機能のみとなったのである。近代化がこのような帰結を家族にもたらすとすれば、父親の存在が疎外されていくのは当然である。なぜなら、ほとんどの父親が、「家族を口実にしてお金を稼ぐこと」の本来的な加害生に無自覚であるからだ。》

近代化とは、父親の存在を確固たるものとしてきた父系社会の弱体化の加速を意味しており、したがって「家族の近代化」は、父系社会の縛りからの家族の解放として、社会的につくりだされてきた父性の機能を剥奪していった。《その結果、父親に残された重要な役割は経済的機能のみとな》り、それにつれて父親の存在は低下していった。社会はもはや父親の存在を引き立ててくれなくなり、保護してくれるものはなくなっていったのである。父親が家族のなかで経済的機能以外においても場所を占めようとするなら、他の有用性を自分自身の手でつくりだすしかなかった。「父親である」ことが困難になりつつあるのであれば、「父親になる」ことを目指さなければならない。「父親になる」ことにおいて、父親としてあらわれる以外に術はどこにもなかった。《ほとんどの父親が、「家族を口実にしてお金を稼ぐこと」の本来的な加害性に無自覚である》と斎藤環が指摘するのは、「家族を口実にする」以外の「お金を稼ぐこと」の目標をほとんどの父親が見失ってしまっているということである。

「家族を口実にしてお金を稼ぐこと」は、家族を口実にしてしかお金を稼ぐことができないということであり、お金を稼ぐために家族を口実にするしかないような家族へのかかわりかたでしかなかった。《父親の不安を最も良く象徴するセリフが「俺が喰わせてやってるんだ」であることは周知であろう。つまり近代化とは、多くの男性が、父親として（あるいは夫として）「俺が喰わせてやっている」と強迫的に役割を確認しなければ、家族の成員たりえない時代なのではないか。冒頭でふれた近代人・鷗外の「配慮」が「不安」に似てみえたのは、鷗外の知性がそうした近代家族のひとつの帰結を鋭く予見していたように感じられたせいかもしれない。》

しかしながら、《多くの男性が、父親として（あるいは夫として）「俺が喰わせてやっている」と強迫的に役割を確認しなければ、家族の成員たりえない》くなりつつある一方

で、そのように振舞えば振舞うほど、父親は《家族の成員たりえな》くなっていく事態を加速させている筈である。父親の「俺が喰わせてやっている」に対して、家族のなかに「だったら喰わせてもらわなくてもいい」という反撥や憤懣は必ず充満するし、時には噴出することだって起こりうるからだ。唯一残った経済的機能に父親がしがみつけばつくほど、家族は父親を経済的機能としてのみ遇することになるのは避けられない。要するに、父親は経済的機能としてのみ、家族のなかに居場所を占めるにすぎなくなるのだ。だがそのこと以上に大きな問題は、父親が「俺が喰わせてやっている」としかいえなくなったとき、家族はそんな父親から離反しはじめ、子どもたちは父親と反対の方向を歩むようになることである。

「家族を口実にしてお金を稼ぐ」父親とは、家族を口実にする以外の目標を見失った父親であり、「俺が喰わせてやっている」としかいえない父親とは、そのことを自慢する以外になにも持ち合わせていない父親であった。子どもはそのような父親をみながら、育つのである。子どもがもしそんな父親に否定的なイメージを募らせるなら、父親に対する否定的なイメージのなかに「働くこと」に対する否定的なイメージが分離しがたく重なっていることが、子どもにとって大きな問題であった。「俺が喰わせてやっている」とは、「俺が喰わせてやっている」ような仕事でもあったからだ。かくして父親に対する否定的なイメージは、父親の「働くこと」に対する否定的なイメージにつながり、子どものなかに父親のような大人に対する否定的なイメージが拡がって、「大人になりたくない」という気分がしだいに醸成されていくようになる。

成熟社会になって、働かなくても食べていける時代になったから、若者たちが「なんのために働くのか」という自問を発するようになったわけではない。この自問は、「働くこと」に対する否定的なイメージが募ってくるなかで発されていることを見落としてはならない。「働くこと」に対して肯定的な気運に満ちている時代であるなら、若者は「なんのために働くのか」という自問を発しながら立ち止まったりはしない。この自問は、我慢してまで働かなくてはならないのか、なんのために我慢するのか、といった自問を手元にまで引き寄せて発されているのだ。「働くこと」が自己実現に結びつく、という幻想はすでに若者のなかにはない。では人は、「なんのために働くのか」。父親の口癖になっている「俺が喰わせてやっている」ような「働くこと」でしかないなら、働くことにはどんな意味があるのか。斎藤環は「『働くこと』は『義務』だろうか」(『ちくま』05・1)で、《人間は本当に働くべきなのだろうか？ 労働の義務とは、それほど自明なことなのか？》と問いかけている。

《宮崎アニメに登場する少年少女たちの多くは「パンダコパンダ」の昔から、きわめて働き者であり、《一貫して「勤勉の美德」がさりげなく強調されている》。

《「ハウル」のヒロインで、魔法で90才の老婆に変えられてしまうソフィーもまた、働き者の少女だ。亡父の帽子屋を継ぐために、せつせと無休で働く彼女は、老婆に変え

られたため家出してハウルの城に辿り着くが、勝手に上がり込んで居座った挙げ句、城の大掃除をはじめ。思えば近代化とは、使役労働から子供を解放して教育を与えることを義務づける過程でもあったが、宮崎はこれに逆行してまで、「勤勉さが報われる」と言わんばかりの物語を作り続ける。

かつて労働運動に深い関わりを持っていた宮崎駿が、社会主義的な文脈において「働かざる者喰うべからず」という規範を主張・実践することに不思議はない。しかし、この有名な規範には、実は根拠が欠けている。労働の義務は自明の前提ではないのだ。

なぜ人は働かなければならないのか。食えないから、というのは理由にならない。現に数十万人規模のひきこもり青年が、あるいはニート青年達が、働かずして食えているではないか。家族に万一のことがあったら生きていけない？ これも事実ではない。裕福なら遺産で食べていける。貧しければ「病気」にしてもらって生活保護を受給すればいい。働かなければ尊厳が維持できない？ それはたまたま現代社会の価値規範が労働を過大評価しているからだ。

そう、いまや労働の価値を保証する自明の価値観は存在しない。そもそも、ある価値観の正当性を厳密に証明するのがほぼ不可能であることは、「なぜ人を殺してはいけないのか」という論議が紛糾を極めた事実がよく表している。人を殺していけない厳密な理由は存在しない。だからこそ、大多数の合意に基づくとみなされる法律によって、殺人は禁止されているのだ。これと同じ意味で、人間が働くべき合理的理由は存在しない。》

まず「働かざる者喰うべからず」という規範はレーニンの言葉として知られているが、キリスト教の新約聖書『テサロニケ人への第2の手紙』のなかに収められている言葉である。社会主義的な規範としてよりも、キリスト教倫理をむしろそこに読み取るべきかもしれない。「なぜ人は働かなければならないのか」という問いを個人の次元で受けとめるなら、いまや「喰うため」という理由は解消されてしまった。では「収入を得るため」か。収入を必要としない人にとっては、理由にならない。「健康のため」という理由も、過剰に「働くこと」で逆に健康阻害を招くこともある。おそらくどの理由もきちんと答えることはできないだろう。つまり、個人の次元では「なぜ人は働かなければならないのか」という問いには、どうしても答えることはできない。そうすると、その問いに対する答えは社会の次元でしか答えることができなくなる。

いうまでもなく社会的な次元では、「働くこと」は自明である。義務を意識しないほどに、「働くこと」は「働くこと」と化している。社会というものは、人が「働くこと」を前提にして成り立っているからだ。我々の大半が「なぜ人は働かなければならないのか」と問うたりしないのは、すでに社会の一員として「働くこと」に踏み入っているからである。社会（的意識）は「働くこと」を前提として、「働くこと」の意味を問うことはあっても、「働くこと」を自明の前提とせずに問うたりはしない。「勤勉の美德」も「勤勉さが報われる」も、そして「働かざる者喰うべからず」も、すべて社会（的意識）

からの掛け声であって、個人の呟きはそこには全く含まれていない。したがって「働くこと」が自明視されて、なんの疑問も異和もなく「働くこと」に入ってしまった先行世代にとって、「なぜ人は働かなければならないのか」という問いは全く無縁な問いであった。

このような問いが迫り出してくるためには、「働くこと」に蹲く世代が出現しなくてはならなかった。要するに、「働くこと」に対する問いは、「働くこと」に蹲くなかからしか起こりようがなかった。「働くこと」に蹲く若者たち、すなわち、ニートやひきこもりと呼称される若者たちが出現するに至って、我々ははじめて「なぜ人は働かなければならないのか」という問いに真正面から直面することになったのだ。その問いに対する答えが個人の次元からではなく、社会の次元からどうしてもやってくるとすれば、その問いを発するニートやひきこもりの若者たちが、彼らの非社会的傾向に注目するだけでも、社会の次元から湧出してくることを押さえなくてはならない。「なぜ人は働かなければならないのか」という問いに出会う余裕もなく、「働くこと」に一心不乱に精魂を傾けて、成熟社会に到達するやいなや、「なぜ人は働かなければならないのか」という問いに見舞われるアイロニカルな事態になったということである。

「働くこと」が快樂であれば、そんな自問を根差したりはしない。「働くこと」のつまらなさが、自体を問うて止まないのだ。ニートやひきこもりは「働くこと」のつまらなさを全身に浴びて、「働くこと」にむかって一歩も足が踏み出せなくなった者たちである。父親が家族にむかって、「俺が喰わせてやっている」と抑圧的に言わざるをえなくなるほど、「働くこと」のつまらなさを彼らは潜在意識に刻み込まれてきているといっでよい。だが彼らはいじらしいことに、「働くこと」などしたくないと叫んでいるのではなく、「働くこと」はしなくてはならないとつねに思いつづけている。「働くこと」が嫌であっても、その嫌なことをしなければ社会の中に入っていけないことをけっして忘れてはいないのだ。斎藤環は《人間が働くべき合理的理由は存在しない》ことを説明した後、「働くこと」それ自体の「加害性」について、ペンを進める。

《前回私は、多くの夫や父親が、まるで追い詰められた悲鳴のようにして「俺が喰わせてやってるんだ」と言いたがる現象を「加害性」として指摘した。それでは働くことは加害なのか。そう、実は私はそう考えている。繰り返すが、働くことが自明に素晴らしいとみなすことはできない。卑近なところでは、社会保険庁が、癒着業者との間で莫大な年金を循環させるシステムを構築した例がある。現場の職員はさぞかし勤勉に働いたことだろう。しかし、彼らの労働は有害である。勤勉な泥棒が有害であるのと同じ意味で。》

夫や父親が「俺が喰わせてやっている」と言いたがるのは、「働くこと」がそういわせているからである。「働くこと」は夫や父親を通じて、「俺が喰わせてやっている」といつもおうとしているのだ。したがって、もし「俺が喰わせてやっている」と父親が言わざるをえなくなる「加害性」を指摘するなら、当然そのようにいわしめる「働くこと」の「加害性」そのこと自体を問題にしなくてはならない。「働くこと」の加害性に

については、しかし「働くこと」の内部では考察されることはない。そのことにおいても「加害性」は累積している。数十万部を超える売れ行きで静かに話題を呼んでいる、小説すばる新人賞を受賞した『となり町戦争』（三崎亜記）は、地方の町の公共事業の一環として「となり町」との戦争が期限付きで計画的に遂行されるという設定によって、「働くこと」の加害性をくっきりと浮かび上がらせている。

戦時下であるにもかかわらず、銃声も聞こえず、戦死者を目撃することもなく、どちらの町の住民も通常の日常生活が平穩に営まれるなかで、だが町の公報に掲載される戦死者数は増えつづけており、目にみえてこない戦争に主人公を含む住民も確実に巻き込まれていることが、この小説で描写されている。この小説を「働くこと」の加害性の視点で切り取るなら、我々のルーティンワーク（日常業務）が戦争を惹き起こす世界（関係）の構造に組み込まれてしまっているという物言いはるかに超えて、我々のルーティンワークそのものが文字通り、戦争にほかならないことを浮き彫りにしている。ビジネスとしての戦争という見方はすでに戦争広告代理店や民間軍事請負企業の出現によって裏付けられているけれども、小説はその延長線上でお役所仕事としての戦争遂行業務を近未来的に予見しているといつてよい。

黙って「働くこと」はどこか（たとえばイラク）で起こっている戦争への加担行為であるなどと持って回ったいいかたをせずに、「働くこと」が戦争そのものに直結している、あるいは戦争そのものである、といい切ったほうが「働くこと」の加害性ははっきりするだろう。斎藤環はある巨大匿名掲示板で発見した、「謝れ職業人」と題された詩を取り上げて、こう説明する。

《その詩は、こんなふうにはじまる。

「ああ、今日も会社に泊まり込みで仕事だよ」／と／つかれた声でいう／職業人は／謝れ／すべての「だめなヤツ」に／細い声で／謝れ

以下、多忙さとストレスを抱えながら勤勉に働く「職業人」たちの姿が活写され、その全員が「手をついて謝れ」と糾弾される。「仕事にきちんと就くことは罪なのだから／それをきちんと謝罪せよ」と。これは皮肉や逆説ではない。しかし、辛い仕事にささやかな喜びを見出した「あなた」は、いったい誰に謝るべきだというのか。

あなたの足下に踏みつけられている「白いブヨブヨした腹」を持つ「すべての弱いもの」たち。作者は彼らに対して「あなたの強さを謝罪せよ」と言う。なぜならあなたは一生懸命働くことで、「すべてのダメなもの弱いものアホなもの／恥ずかしいもの腐ったもの古くなったもの」を破壊しているからだ。だから作者は「あなたが彼らの年金を払ってやることに対して／謝れ」と付け加えることを忘れない。この詩はこんなふうで終わる。

3月15日くもり／自分がたまたま頑丈であり／毎朝おはようと笑って出かける／そのことに／ごめんな／さい

勤勉に働くことの有害性に対する、これほど明晰で心に迫る告発を私は初めて読んだ。

もちろんこんな主張に対しては、反発する人のほうが圧倒的に多だろう。しかし、反発するだけなら私にもできる。私自身が、価値判断としてはこの詩の主張に賛成できないからだ。そう、個人としての私は「勤勉に働くこと」の素晴らしさを、どうしても否定できない。しかし、これはやはり臆見ないし偏見の一種なのではないか。

この偏見から降りない限り、私は「ニート」や「ひきこもり」を批判し、「専業主婦」を排斥するほかはなくなってしまう。しかし私は、そうした姿勢が誤りであることを知っているし、いままでもそう主張してきた。なぜなら「勤勉の美德」という価値判断こそが、人々を社会的に動員するべく形成されてきたイデオロギーの一種なのだから。》

職業人がまず最初に謝らなくてはならないのは、ほかにすることがないためになにも考えずに、収入を得るために毎日会社に出勤する私自身に対してであろう。この詩は、働くしか能のない「だめな」私に謝る自虐的な詩としても読める。《多忙さとストレスを抱えながら勤勉に働く》ことによって、最大の迷惑をかけているすべての「私」に職業人は謝れ、職業人のなかに解消されてしまっている「私」に対して、「私」をみえなくさせている職業人は謝れ、と続かなければならない。《一生懸命働くことで、「すべてのダメなもの弱いものアホなもの／恥ずかしいもの腐ったもの古くなったもの」を破壊している》「私」に対して、職業人は謝れ、職業人の《足下に踏みつけられている「白いブヨブヨした腹」を持つ「すべての弱いもの」たち》である「私」に、職業人は謝れ。

「私」が職業人になったとき、同時に非職業人としての「私」も生み落とされる。職業人になった「私」が非職業人としての「私」を見下すようになったとき、「私」は職業人そのものとして「私」のなかから非職業人としての「私」を排斥しようとする。しかしながら、前述してきたように「働くこと」は、その加害場所に「働くこと」に無縁な層を必ずかかえこんできた。その「働くこと」に無縁な層は、誰もが働かなくては喰えない時代にあっては目立つことはなかったが、働かなくても喰える成熟社会になると、ニートやひきこもりとして大量に目立つようになった。「働くこと」は「働くこと」としては目にあらわれてこない層をたえずかかえこんできた、その層がニートやひきこもりとして目にあらわれてきただけにすぎないかもしれないのに、彼らのような存在たちによっても成り立っている社会は、職業人から彼らを分別し、排斥する敵意を示すようになった。そう、社会の危機として彼らを放置できなくなってきたのだ。

《この詩に出会って以来、私はいっそう、「勤勉の美德」なる概念については、疑いを持つようになった。「謝れ職業人」の過激さは、勤勉の自慢が有害である以上に、勤勉の美しさまでが暴力的であるというところまで届いていることだ。その職業が社会にとって有益か否かに関係なく、「職業を持つもの」は「持たざるもの」に謝罪しなければならない、という主張。この過激さは、果たしてどれほど理解・共感されうるだろうか。

私はこの詩を、前回述べた「俺が食わせてやってるんだ」、あるいは「好きで仕事をしているわけじゃない。家族（社会）のために仕方なくやってるんだ」といった主張に

対するカウンターとして読んだ。この種の主張の理不尽さは、理屈では指摘しにくい。ならば、これに対抗するような理不尽さを創造することで、別の価値を提示できるのではないか。とりわけ、家族をこうした「食わせてやっている」言説で押さえ込もうとしたことがあるひとならば、そう言い切った後の後味の悪さ、後ろめたさを知っているはずだ。

この「後ろめたさ」はどこから生ずるのか。私の考えでは、このような言い方が許される場合があり得るとすれば、それは(1)就労が義務であり、(2)こちらは義務を果たしているのに、(3)相手は義務を果たしていない、という場合のみである。しかし、みてきたように就労は義務とは言えない。それを義務と強弁するから、後ろめたくなるのではないか。》

私の考えでは、この「後ろめたさ」は口にしないほうがいいことを開き直って口にしてしまったところからやってくる。口にしたのは、働く夫や父親に対する感謝や尊敬の念が、妻や家族にあまりにも欠如しているのを感じ取ったからだ。家族に働く父親に対する尊敬の念を感じ取れるなら、敢えて口するまでもない言葉を吐いたが故の「後ろめたさ」なのである。つまり、「俺が喰わせてやっている」は、家族に感じ取れなくなった働く父親に対する尊敬の念を強要する台詞なのだ。父親が一家の大黒柱であることが社会でも家族でも通用しているあいだは、父親に対する尊敬の念は当然とされていたから、そんな台詞を吐く必要はなかった。だが父親が「働くこと」をしているなら、母親だって家の切り盛りをし、子どもは学校や塾で勉強をして、各々が各々の役割分担をきちんと遂行していることで成り立っている現代の家族関係では、殊更父親が自分への尊敬の念を改めて呼び起こすために、「俺が喰わせてやっている」と言わざるをえなくなること自体が、家族から尊敬されていない父親としての惨めさを曝けだしていたのである。

父親が働いて稼いでくることだけで、家族から感謝されたり尊敬される時代ではもはやなくなった。家族から尊敬されたければ、働いて稼いでくることのうえにある別の力を付け加えなくてはならない。家でも父親がすべての面でリーダーシップを発揮するとかの力量を発揮することなく、家族からの尊敬を当てにして「俺が喰わせてやっている」と吐くことは、むしろ父親としての敗北にほかならなかった。そのことを本人がどこかで感じ取っているからこそ、後ろめたくなるのだ。しかし、父親にその台詞を吐かしているのは、「働くこと」そのものなのである。「働くこと」はどこかでいつも家族にむかって、世間にむかって、「自分はこうやって一人前に働いている」という身振りを示して、尊敬の念を呼び起こそうとするのだ。だから斎藤環がいうように、《その種の尊敬は、そのような生活スタイルがどうしても取れない人たちに対する軽蔑を伴わずには成立しないから》危険であり、《そうした身振りに陥ってしまうという点に「就労の加害性」が宿る》けれども、「働くこと」の加害性の危険は、小説『となり町戦争』でも予見されつつあるように、「働くこと」が人間そのものを破壊する次元にまでもはや突き入っていることを覗き込まなくてはならないだろう。 2005年7月16日記

